Zenly 利用をめぐる若者の親密圏と移動圏に関する調査研究

代表研究者　　藤　田　結　子　　東京大学大学院　情報学環　准教授
共同研究者　　鈴　木　亜　矢　子　中央大学　文学部　兼任講師

1 本研究の背景

携帯端末とソーシャルメディアが普及した現代のモバイル化社会において、私たちは他者との常時接続の状態に置かれている(ボイド 2014)。Line や Instagram をはじめとするさまざまなソーシャルメディアを共有することで、他者との繋がり方の変容が若者の友人関係の変質も招いている。携帯端末とソーシャルメディアの普及によって若者の友人ネットワークは拡大し、既存の対人関係の継続だけでなく、新たな対人関係構築も容易にする時代へと突入した。2000 年代に入り、若者の友人関係は希薄なものから濃密化したものへと変質し、このことは岩田考(2014)が 2001 年と 2011 年に行った比較調査のなかでも指摘されている。10 年間で若年層の「身近な友人数」の減少が見られた一方、「遠方の友人数」の拡大傾向が確認された。岩田の分析では、若年層の友人関係の希薄化が進展したとは認められず、携帯端末とソーシャルメディア利用が友人関係の濃密化を促していると述べた。同様の論点は原田曜平の『新村社会』(2010)や土井隆義の『友だち地獄』(2008)の中でも指摘されており、携帯端末とソーシャルメディアの普及が、友人関係の濃密化に大きく寄与すると考えられている。

また、友人関係の濃密化と並行して、友人関係内部の同質性の傾向も見られる。鈴木謙介(2005)や辻泉(2006) は、メディア環境の変容はむしろ親密圏の領域を狭め、友人関係の同質化を強化していると指摘している。若者はソーシャルメディアを介した情報によってリアリティに対し「既視感」を感じ、それが新たな人間関係の構築や非生活圏の世界を実際に経験する動機を削いでしまっている。携帯端末やソーシャルメディアを介して拡大する友人ネットワークが、相対的に若者の視野や行動範囲を狭め、日常で実際に行動を共にする仲間や行動範囲は変化しないことを原田は「半径 5 キロメートル生活」と称した(2010:152)。

このような背景を踏まえ、ソーシャルメディア利用が若者にもたらす影響については多角度から研究の蓄積がなされてきたが、本研究で注目するのはソーシャルメディアの位置情報を介して実践される友人関係の維持と移動性についてである。本研究は、若者たちのソーシャルメディアの位置情報利用が、どのように友人関係の在り方に影響を及ぼし、それがどのように日常の移動経験と相互関連しているかを、インタビューを中心とした質的調査をもとに明らかにするものである。

2 本研究の目的と問い

2-1 Zenly とは

まず本節では、本研究で分析対象にした Zenly というソーシャルメディアの特徴について述べていく。Zenly は地図コミュニケーションアプリである。元々はフランスの Zenly 社が 2015 年に開発したアプリだが、2017 年に Snap 社が 2 億 1330 万ドルで Zenly を買収した(鵜ノ澤 2019)。Zenly は 2023 年 2 月にそのサービス提供を終了したが、若年層に人気を博していた。2021 年 12 月時点で Android 版アプリの総ダウンロード数は 5000 万回以上を記録し、無料アプリの「ソーシャル」のカテゴリー内ではダウンロード人気 5 位に位置づいていたほどだった。また、女子中高生のマーケティングやリサーチを行っている「マイナビティーンズラボ」によると、2019 年に発表した「2019 年ティーンが選ぶトレンドランキング」では、「流行ったモノ」カテゴリー内の 5 位に Zenly が挙げられていた(マイナビティーンズラボ 2019)。

Zenly の世界地図上には、自分と友達登録した人の現在位置だけでなく、滞在時間・移動速度・利用端末の電池残量も表示される。くわえて、それまでの滞在実績に基づいて自宅・仕事先・学校などの位置情報を推測してアイコン表示する。位置情報を曖昧にする手段もいくつか用意されているが、繋がっている相手にはその意図が筒抜けになる可能性が高い仕組みになっている。したがって Zenly は秘匿性が低く、高度な個人情報をアプリ上に提示する。

これまでも「位置情報チェックイン機能」という形で、オンライン上の空間と現実空間の位置情報の交差を発信する手段はあった。だが既存のソーシャルメディアにある機能とは異なり、Zenly ではリアルタイムに位置情報を開示するため、個人情報に関する情報開示程度をコントロールすることはほぼ不可能である。このことから、Zenly ユーザーは位置情報を常に発信しながら、偽りの自己呈示ではなく「ありのままの自分」に近い姿を自己開示し、積極的に他者との接続や交流を試みていると推測できる。

2-2 オンラインとオフラインの交差

オンラインとオフラインの結合により、さまざまな社会的場面における関係性が相互作用しながら複雑な様相を呈している。日常生活におけるオンラインとオフラインの連動に関しては、たとえば子育て期の母親たちのネットワークに関する研究のなかで、スマートフォンが関係維持のために戦略的に利用されていることを示している(天笠 2016)。他にも、Instagram といったソーシャルメディア内で提示される非日常性を帯びた情報が、現実空間のモビリティを誘発するものとして指摘されている(遠藤 2019)。このようにオンラインとオフラインの交差の深化は、さまざまな場面において、個人の行動をある程度規定しながらも新たな行動を誘発している。

では、若者が携帯端末やソーシャルメディアを介して同期的な情報共有をするなかで、友人関係との付き合い方や行動パターンはどのように変化してきただろうか。土橋臣吾(2011)は携帯端末上の情報プラットフォームと都市の物理的プラットフォームの協働関係を指摘している。土橋の調査では、女子高校生が携帯電話を操り、ランダムに友人と接続しながら都市空間を移動する様子を描いている。その女子高生の行動においては、携帯端末は「いま―ここ」を「つど編集し、その時々で、最適な『場面』を創り出すためのツール」であり、都市空間はそれを支える「プラットフォーム」であると論じている(2011:150-151)。このように、メディア空間と現実空間の融合を背景に、場当たり的な空間やライフスタイルを構築する現代の若者の姿が浮かび上がる。これが現代の若者の特徴であるとするならば、若者が Zenly をインターフェイスとして使うことは、友人との付き合い方や移動実践にどのような影響を与えるだろうか。若年層のなかでも、とりわけ大学生はモビリティが相対的に高いと考えられる。しかし、濃密化・固定化したとされる若者の友人関係に、Zenly は一体どのような変化をもたらし、現実空間でのモビリティに直接的な影響を及ぼすだろうか。

友人関係と位置情報の常時共有や、実際の行動範囲に着目した国内での研究の蓄積は少ない。そのため本研究では、位置情報を友人と共有する Zenly ユーザーへのインタビューを中心とした質的調査を通じ、現代の若者の友人関係と移動行動実践に関して明らにする。具体的には、(1)Zenly 利用によって友人との付き合い方にどのような変化をもたらしたか、(2)(1)と移動行為の間に相互関連性は見られるのかを本研究の問いとする。現代の若者の友人ネットワークと移動実践に関する流動性と固定性の両義的な側面に着目しながら、現代の若者の「半径 5 キロメートル生活」の理解の深化を図る。

3 調査方法

本研究調査は、茨城県在住の大学生を対象に 2022 年 10 月から約 1 か月間実施した。スノーボール・サプリング法で本研究調査協力者を募り、男女計 20 名に半構造化インタビューを行った。調査協力者の概要は表 1 の通りである。本稿では、調査協力者の匿名性を保障するために、本名ではなくアルファベットを振っている。また、同行調査の許可を得たインフォーマントには参与観察を行い、なるべく日常に近い状況で Zenly や他のソーシャルメディアを利用している様子のデータ収集をし、Zenly 利用をめぐる若年層の親密圏と移動圏の重なり方を考察した。各 2 時間前後の半構造化インタビューを行い、許可を得て録音した後に逐語録を作成した。

調査対象者の Zenly 利用期間は 3 ヶ月から 4 年と個人差があるが、位置情報共有の行為は生活に溶け込んでいる。日常化した同期的な位置情報共有行為を精緻に分析することで、友人関係の在り方と移動行為がどのように現実とメディア内で交差しているかを把握することが可能である。

調査協力者	年齢	性別	個人的移動手段の有無	居住形態
A	21	女	自家用車	実家暮らし
B	21	女	無	一人暮らし
C	21	男	自転車	一人暮らし
D	23	女	原付バイク	実家暮らし
E	20	男	自家用車	実家暮らし
F	21	男	自家用車	実家暮らし
G	20	男	自転車	一人暮らし
H	20	男	自家用車	実家暮らし
I	20	女	自転車	一人暮らし
J	21	男	自転車	一人暮らし
K	21	男	自転車	一人暮らし
L	22	男	原付バイク	一人暮らし
M	20	男	自転車	一人暮らし
N	20	女	自転車	実家暮らし
O	20	女	無	一人暮らし
P	21	男	自転車	一人暮らし
Q	22	男	無	一人暮らし
R	19	女	自転車	一人暮らし
S	21	男	無	一人暮らし
T	19	女	無	一人暮らし

表１：研究調査対象者の基本属性

また、国際的な視点を取り入れるために、Zenly が開発された本場フランス・パリに赴き、2023 年 2 月から約 3 週間研究調査を実施した。大学密集地域や若者が多く集まる場所へ赴きフィールドワークを行った。調査当初は、現地の若者の Zenly の利用実態把握に努めたが、そもそもフランス発のアプリである Zenly を知らない若者が多数を占めていたため、他のソーシャルメディアにおける位置情報共有機能についての調査に切り替えた。結果、類似機能を有する Snapchat を利用しているフランス在住の 17 歳から 24 歳までの男女 14 名(男性 3 名、女性 11 名)に対して調査を実施することができた。14 名中 1 名は大学を中途退学して就職活動中の若者であり、残りの 13 名は現役大学生であった。各 25 分～2 時間強にわたる半構造化インタビューを通して調査を行った。茨城の調査で用いたインタビューガイドを用いて比較調査することを期待していたが、パリでのフィールドワークには時間的制約があり、アポイントメントなしのインタビュー調査が大半を占めた。したがって、すべての質問項目を網羅することができず、本研究の問い(2)移動実践に関するデータは得られなかった。本稿では、パリの若者が位置情報共有に対してどのような意識をもっているかを、3 章の後半に述べていく。なおフランスの調査対象者には 1 から 14 までの数字を振り当てて表記する。

4 調査結果

本章では､2 章で述べた問いを検証するために Zenly 利用による行動変容に関する調査結果を述べていく。ここではインタビュー内の質問者の発言は「質」と記す。

調査対象者 20 名のうち、14 名は地元を離れて水戸で一人暮らしをしており、残り 6 名は茨城県内の実家と家族と同居していた。大学生の経済状況を鑑みると、自家用車や原付バイクなどの長距離移動を容易にさせる移動手段を所持している者は少ないと推測した。実際、調査で明らかになったことは、普段の生活で自家用車を利用している者は 4 名いるが全員実家暮らしである｡そして原付バイク利用者は 2 名(一人暮らしと実家暮らし)であった。残りの 14 名については、生活圏内の移動手段は徒歩・自転車・タクシーであり、遠出する時は高速バスや電車、友人の車の送迎、そしてタクシーを利用していた。したがって、個人的移動手段を所持している 6 名と所持しない 14 名との比較も簡潔に後述したい。

4-1 Zenly フレンズとの付き合い方の変化

実家暮らしの H さんは、高校時代の友人 9 人と妹 1 人と Zenly アカウントを交換していた。主に友人たちと遊ぶための手段として Zenly を利用していた。

H：最近は減ったんだけど、あぁ友達が今どこにいるかなぁって(Zenly を見ていた)。よく一緒にゲームする友達がいるので、ほぼ毎日(一緒に)ゲームやっている奴がいたので、今バイト行っているかなとか、今学校にいるかなというのを見て、家にいたらとりあえず電話かけて、一緒にゲームするという感じで。とか、「今から家って行っていい？」とか、遊び行く時とかゲームする時とかに使います。

質：先ほど友人から誘われて Zenly やったって言っていたんですけど、その同じ友人との遊び方が変わりましたか？

H：ぶっちゃけ、そこまで変わらなかったです。別に Zenly を一応持ってなくても、ある程度そいつの時間を把握しているから、大体このぐらいの時間だったら来るだろうみたいな感じで、そこまで変わんなかったですね。ただ、なんか誘う時の１つの指標になったというか。タイミングは計りやすくなった。今までは「このぐらいかな」って感じだったけど、Zenly で確信を持って誘えるようになったかな。

H さんと Zenly を共有しているほとんどは高校時代からの仲の良い友人たちであることから、遊びやご飯の誘いといった自由時間を過ごす人間関係は、既存の友人関係内で完結していた。上記の語りに見られるように、H さんは Zenly 利用が友人との遊び方に及ぼした影響について「そこまで変化はない」としながらも、相手の行動や状況を把握するのに役立っていることがわかる。実際 Zenly フレンズの行動を把握することで、以下のような変化もあったという。

H：バイト先近い子がいるんで、家から。その子が今日(アルバイトに)行って、明日、あいつ授業ないから今日遅くなっても大丈夫かなっていうふうに(ご飯に)誘っていく時もあるし。それがほとんど突発的に行くって。

質：突発的な？

H：突発的なそういう「ご飯行こう」ってノリが増えたっていうのもあるし。あの、なんか、どっか学校帰りとか東京から帰ってくる電車の中とかで連絡が来るとか。お前も来いよみたいな感じで(連絡が)来ることが増えた感じがします。

以上の発言にあるように、相手の生活パターンや現在位置を把握することにより、コミュニケーションの働きかけが促進され、メディア上だけでなく現実空間においても必然的に遊ぶ頻度が増えた。

調査協力者たちの語りに共通して見られたのは、(a)遊びに繋がるようなコミュニケーション頻度の増加、そして(b)即時的な集まりの２点である。とくに実家暮らしの調査対象者は、Zenly を高校時代までの既存の友人関係内で共有し、大学で作った新しい友人関係とは一線を画す傾向にあった。したがって、Zenly を介したコミュニケーションは、既存の人間関係維持とその強化の一端を担っている。この傾向は上記の H さんの例にも当てはまる。

ここに見られるコミュニケーションの増加と即時的な集まりの傾向は、他の調査対象者の語りからも窺える。0 さんは高校 1 年生の時、学校の友人たちから Zenly を勧められ、以来 Zenly は 0 さんの生活の一部となっていた。Zenly を交換している 10 人のうち 7 人は地元新潟の友人たちで、そのほとんどが小学校からの長い付き合いであった。0 さんが茨城県の大学に進学してからは、離れて暮らす母親、同じ大学に通う友人 1 名、そしてアルバイト先の友人 1 名とも Zenly を交換した。では、0 さんは水戸で暮らすうちに地元の友人たちとの関係が疎遠になったかと訊くと、以下のように答えた。

O：(今では Zenly を)見ることは少なくなったけど、でもなんか結構、その新潟にいる友達が私の Zenly を見て、なんか「今どこにいるの？」みたいな。「どこどこにいるでしょ？」とか、あと新潟に帰省した時に友達が「今帰ってきてるでしょ？」みたいなのは来るから、そこらへんはすごい Zenly あってよかったなーっていうのは(ある)。

0 さんは、今ではもはや生活圏が重ならなくなった家族や友人たちとの連絡の手段として Zenly を利用していたが、地元新潟にいた頃の遊び方は、Zenly を使い始めた後大きく変化したという。

O：（遊び方や待ち合わせの仕方も）本当なんか気軽になった。今まではちゃんと前日から「何日何時集合ね」とかもあったけど、Zenly 入れてからは、ほんとなんか Zenly 見て近くにいたら「あっ、近くにいるじゃん、今から遊ぼう」みたいな。「あっ、じゃあここね」みたいな。本当に気楽に遊べるようになった。（中略）（高校生の頃は違う高校へ通う友人を誘う際）結構学校終わりに Zenly を見て、なんか近くにいる子は「この後カラオケ行かない？」みたいな。「あっ、じゃあこのまま行こう」みたいなのはあって、だから休日はあんまりとくにどこにいるんだろうと（思って Zenly を見ることと）かはなかったかな。

前述したとおり、コミュニケーションの増加と即時的な集まりが増えた。では、Zenly を交換してない人との遊び方にどのような差異が見られるだろうか。

O：（遊びについては）ちゃんと計画してる。だからほんと遊ぶ何日前とかに「この日空いてる？」ってのを自分のカレンダー見て確認して、「この日一緒に遊ぼう」って（誘うと）いうのはあるけど、前日に飲もうとかはないかな。

たとえば、他の調査対象者 L さんが「時間の効率化」と表現するように、Zenly 共有は、友人と交流することを容易にするだけでなく、一緒に遊びに出かけて待ち合わせをする時、遠出して現地で合流する等の状況において、合理的なコミュニケーションを行うことが可能になる。このように、相手の現在位置や行動パターンを高レベルで把握することを可能にする Zenly は、時間の効率化と、それにともなうコミュニケーションの合理化を生み出す。

Zenly を介したコミュニケーションの増加については、相手の行動を推測・把握することで、コミュニケーションを働きかけやすくなったことが前提としてある。この点に関して、O さんと B さんが次のように述べていた。

O：（中略）Zenly 交換した子だと、この子だとすごい自分のことすべて言えるし、しかも気楽な感じだから、なんか急に誘っても遊んでくれるしっていう、そういうイメージがある、気楽さがある。使ってない子だと（中略）今何しているのかがわからないから、もし誘って断られたらどうしようとか、なんか勝手にその子が忙しかったらどうしようとかそういうので、だからその子が家にいるかどうかもわからないから。Zenly 無いから聞きづらいし。

B：やっぱ誘うにしても、使ってない子が忙しそうな子とかだと LINE するのも申し訳ないし、電話するってなっても、忙しかったら迷惑だろうなとか思うけど、Zenly 見ればこいつ暇だとかわかるから、結局 Zenly 持ってる子とこいつとこいつと３人でご飯行かん？みたいな。

上記の発言に見られるように、相手の位置情報から現状を察することでコミュニケーションを取りやすくなることがわかる。B さんは主に深夜に Zenly を見て相手がまだ起きているかどうかを確認し、「起きてるやんってなったら、今から家行っていい？」という遊び方をしていた。コミュニケーションを取る気軽さとそれによる交流の増加は、位置情報から相手の状況や感情を読み取ることを基盤としている。位置情報から相手の状態を察することができ、そして互いに配慮することが求められる対人関係の在り方を、荒井(2022)は「コミュニケーションの合理化と配慮の合理化」と指摘している。

調査対象者が Zenly フレンズと連絡を取る時間は、学校やアルバイトがひと段落した夜の時間帯が圧倒的に多かった。Zenly を通じてコミュニケーションを取り、その後オンライン上で集まってゲームをしたり、あるいは徒歩・自転車・バスで行ける友人宅を訪ねたり、水戸駅周辺のカラオケ、ご飯、飲みに行くという行為が多く散見された。こうしたメディア上だけでなく現実空間にも連動する突発的な集まりは、2 章 2 節で土橋が指摘していた、都市空間をプラットフォームにライフスタイルや自己イメージを形成する若者の特徴と合致する。

4-2 移動行動の変化

本節では、2 つ目の問いである「Zenly フレンズとの付き合い方の変化と移動行為の間に相互関連性は見ら

れるのか」を検証するデータを述べていく。前節では、コミュニケーションの増加と即時的な集まりの増加について検証した。では、これらの増加が現実空間での移動行為にどのような影響を及ぼしただろうか。

Zenly 利用によって行動範囲に変化が起きたと答えた調査対象者は、個人的移動手段を持つ 6 名のうち 2 名、個人的移動手段を持たない 14 名中 3 名であった。したがって、変化なしと答えた調査対象者が圧倒的に多く(20 名中 15 名)、Zenly 利用による移動範囲の増減に関しては多くのデータは得られなかった。以下は、変化したと答えた２つのパターンについて記述する。

関東他県出身の P さん大学 3 年生は、高校生のときに「その場のノリ」で Zenly をインストールしたという。P さんは Zenly に対する当初のイメージを「最低なアプリ」と表現し、常時接続することで安心感を覚える人間関係の在り方に疑問を呈していた。一方で、Zenly に対して、受け狙い、面白そうという肯定的なイメージも抱いており、結局中学校と高校の友人 10 人と繋がった。

P：(Zenly の主な利用目的として)人に位置情報を言うとか、友達の位置情報を確認するってわけじゃなくて、あの Zenly ってその副次的な（中略）こういった所に印が付くんですよ（中略）歩いた所とか、地図情報で把握した所にこう。これが面白くて、なんかそういうわけじゃないけど。この白い所が、あの歩いた所を塗っていく感じで(中略)これが面白くて、他にこれやってくれるアプリがないから。位置情報はそんなに使わないかな。たまになんか都内とか行った時に、「なんかあの近くにいるなあ」みたいな。なんか、その、ここを塗られているかなって確認した時に「ああ、なんか近くにいるな」って思うぐらいです。それで（その Zenly フレンズに）会ったりとかはしない。

P さんは移動履歴を視覚的に確認できることに、まるでゲームのような楽しみを覚えていた。P さんは Zenly でこうした移動履歴を再確認したり、また旅行や遠出した際、その土地の道や店を調べる時に地図機能として使っていた。

P：Zenly を使い始めて大学生になって、みたいのがあるけど、(大学生だから)行動範囲が広がるし(Zenly 上の地図の色を)埋めたいから、まあいろんな所に行きたくなったよね。まあそれが Zenly の直接な影響とは言えないと思うんだけど(中略)でも、旅したいなみたいなのは思う(中略)友達で行くなら友達と行くし、1 人で行くのが１人じゃなかなか難しいけど、本当に行きたければ１人で行くし。

Zenly 利用が P さんの実際の行動変容には反映されていないものの、Zenly アプリ上の地図を介して現実空間に対する意識が変化したことがわかる。上記の語りにあるように、調査対象者のなかに行動変容が見られた理由として、大学生になって経済的余裕が得られたこと、そして自由時間の増加が考えられる。また、コロナ禍における行動規制が緩和されつつあることも鑑みると、Zenly 利用のみが行動変容に影響を及ぼしたとは考えにくく、この点は他の調査対象者からも指摘されている。

Zenly 利用が引き起こした移動範囲の拡大行動と認められるデータは 3 件だった。Zenly 利用によって移動が誘発されたことは、以下の E さんが述べている。

質：たとえば友達が遠くに行ってて、自分も旅行行きたいなとかはありましたか？
E：まあなんか、自分がずっと家にいることが多いので、外にいる友達とかを見てると、「あー自分も外に出なきゃ」みたいなことは思います。
質：実際(外に)出ますか？
E：最近は割と出ます、結構(中略)友達と公園行きました夜中に、本当に気分転換です。

E さんの発言にあるように、Zenly 上での友人の行動に刺激され、移動が誘発されていた。だが、移動距離自体は旅行のような広範な移動ではなく、あくまで日常の生活のなかでの移動が多少活発になる程度に収まっていた。他にも、J さんが述べるように、移動が刺激されるのは「自分の中に元々あったものを強くしているかもしれない」が、他人の行動を見ることが自らの行動力意欲に発展しているケースが散見された

さらに、前述の O さんの場合は、Zenly 利用による明白な移動誘発行為が認められた。

O：当時は高校生だったから遊んでるってことを(友人に)知ってもらいたかったのかもしれない。やっぱ

り JK(女子高生)って、なんだろう、自分がワイワイしてるってのを見せたかった、ていうのがあると思うから、本当に幼いんだけど。(中略)今日もカラオケ行ってるんだよとか、なんか今日もめっちゃ遊んでるみたいなのを、ちょっと友達に言いたかった。

元々インドア派であると自認している O さんであるが、Zenly を見た友人から「ずっと家にいるね、外に出なよ」と言われた経験もあるという。自分のライフスタイルを把握されることによって、相手の価値観との違いが浮き彫りになったとの同時に、相手の価値観に沿う自己呈示をしていたことがわかる。

O：やっぱその子たちは、小学校の頃からずっと仲が良くて、その子たちはワイワイして、でも自分がちょっとインドアな面があるっていうので、ちょっと葛藤はあった。(中略)やっぱりずっと仲がよくて、しかも大好きだったから、なんだろう、そういう価値観の違いとかも自分のなかでは乗り越えていかないといけない、一緒にいたいからこそ、そういう「外に出て遊ぶ」っていうのが当たり前だった。そういう(友人たちの)価値観を受け入れなきゃいけないっていうのはあった。でも高校生ながらの、今はそんなにないけど、高校生って、そういう相手に合わせていかないと、なんだろう、友達のいない高校生っていうのが自分は嫌だったから、合わせてたのかもしれない。

上記の語りは Zenly を使い始めた高校生の頃の出来事であるが、Zenly を共有していた地元の友人たちの価値観が、O さんの行動規範をある程度規定したことが明らかである。
一方で、以下の発言は、上記とは異なる移動傾向を示している。

L：元カノ(と繋がっていた)時はパチンコとかね。まあ、それもまずいよね、怒られた時は。(自分がパチンコに)行かないって言った時はもう行けないなぁ。あとその Zenly があるからとは言わないまでも、サークルですごい仲良かった子とかいたんだけど、女子が多くて、その子の家とかはあんまり行かないようにしてたかな。行ったらばれます。まあでも男子の家って言えば最悪いいんだろうけど。まあ、あんま行ってなかった。

常時位置情報が相手に開示されていることを意識することで、自分の行動の是非を問うようになったことがわかる。L さんのように行動抑制されたケースは 2 件と少数ではあるが、T さんの語りにも見いだせた。

T：日常生活で言えば、自分の位置情報が共有されているので、余計なところに行けなくなったというか。たとえば、彼氏に言っていない報告していないところに、大学の方のお友達、女の子であっても、とファミレスとか、それこそ COCO’S とかに行ってご飯食べるっていうのもなんかちょっと罪悪感っていうか。なんか見られた時に何も言ってないのにみたいな感じで捉えられちゃうのかなっていうふうに思って。だから、余計な所に出掛けなくなりました。

これらの発言から、Zenly 利用は行動欲を刺激するだけでなく、逆に Zenly を介した相互監視状態が、個人の行動を制限する場合もあることがわかる。こうした行動変容は、位置情報を共有している相手との同調的な相互行為であるといえる。

4-3 フランス在住の若者の Snapchat 利用

修士課程に在籍する 2 番さんは、3 限の授業の前にキャンパスの敷地内で休憩していた。「煙草を吸いながらでもいいですか？」と言って、インタビューに応じてくれた。2 番さんはパリ郊外出身で、3 年前から Snapchat を使っていた。当初は「アカウント交換している人全員が私の位置情報を見ることができた」と言うが、位置情報を共有できる相手を選択できる機能が搭載されてからは、「安心して」Snapchat の map 機能を使えるようになったという。Snapchat には 100 人以上の名前があったが、map 機能を共有できる相手を 12 人まで絞った。

2：位置情報を見ると、(共有している 12 人が)何をしているか正確な情報を得ることができる。だから、map 機能を共有していない友人たちと比べると（その 12 人に対しては）より親しみを感じる。別に

毎日話すわけじゃないけれど、どこにいて何をやってるかわかると、それが海外でも、なんていうか、絆が続いている感じがする。

なかにはドイツとスペインに暮らす友人もおり、既存の関係維持手段として Snapchat が使われていた。この点は茨城の調査対象者たちから得られたデータの傾向と一致する。では、位置情報共有の利用方法に差異はあるだろうか。以下は大学 1 年生の 10 番さんの発言である。

１０:Snapchat は迷惑メッセージが多くて好きじゃないんだけど、一番良いのは位置情報共有、友達に位置情報を見せられることだと思ってて。先週もデートする時に使ったの。その時に、友達に私がどこにいるか知ってほしくて。万が一危険がことがあった時のために。

他にも、とある友人の母親からの要請で、居場所がわからない友人の現在位置を調べるために、Snapchat を開き友人の母親との連携をとったこともあるという。このように、安全面の観点から Snapchat の map 機能を使うことはごく稀にあるが、それ以外の理由でその機能を利用することはなかった。10 番さんのケースに見られるように、フランスの調査対象者たちは、map 機能を条件付きで利用している者が多かった。その理由としては、自分と相手のプライバシーを保護するために境界線を引くべきだという考えであった。位置情報共有の利便性を認めながらも、個人情報をどの程度、誰に開示すべきかという意識を強くもち、再帰的に選択する傾向が見られた。

なかには、位置情報共有をしないと答えた者もいた。17 歳の調査対象者 1 番さんは大学を 1 年で中退し、目下パリでインターン研修を行っていた。東部ブザンソン出身の彼女は、Twitter、Instagram、WhatsApp、BeReal、Snapchat を使用し、毎日欠かさず友人や母親と交流していた。なかでも一番利用していたのは WhatsApp であった。ソーシャルメディアのヘビーユーザーと自認していたが、Zenly に相当する Snapchat の map 機能は使わないと述べた。

1:位置情報をシェアすることに抵抗を感じる。自分がどこか知らない土地に行った時に地図を見たりするくらい。それだけ。でも、なんでみんなが（map 機能を）使いたくなるかわかる。

Snapchat を交換している友人たちは map 機能を利用しているが、友人たちから位置情報共有に関して同調圧力をかけられることもなく、なにより 1 番さん自身が位置情報を開示することにメリットを感じないため利用していなかった。

このようにフランスの調査対象者たちは全体として、位置情報共有に対して抵抗感や危機感を抱いていること、また位置情報共有をしていても場面的に使用していることなどがわかった。そして、互いの安全を確認する目的で主に位置情報共有機能を使っている調査対象者が多いことから、位置情報の性質として監視の意味合いが強いことがわかった。Zenly では限定的な利用ができないことを考慮しても、茨城県在住の若者を対象とした調査と比較すると、フランスの若者の位置情報共有利用は、日本での調査が明らかにした「位置情報共有が友人関係の深化に寄与する傾向」とは大きく異なった。

５ まとめ

本研究では、Zenly 利用によって友人との付き合い方にどのような変化をもたらしたか、また友人関係の付き合い方の変化と移動行為の間に相互関連性は見られるのかに関して、記述と分析を行ってきた。調査対象者たちは、Zenly を主にコンサマトリーな使い方ではなく実用的な道具としての Zenly 利用の実態が浮き彫りになった。プライベートな情報共有が常態化したなかで、互いの状況を察しながら場当たり的なコミュニケーションが行われ、直接的な相互行為と生活圏内での移動行為に連動することが明らかになった。したがって、メディア空間での同期的な繋がりは、現実空間での直接的な繋がりにも連動し、親密で閉鎖的な友人ネットワークの強化に寄与した。つまり、同質的であり排他的である友人関係は、Zenly 利用により膠着したものになったと捉えることができる。

そして、個人的移動手段を有することと、Zenly 利用による移動範囲変化の関連性は認められなかった。すなわち、Zenly 利用は Zenly フレンズとのコミュニケーション増加や生活圏内での活発な移動を促したが、

遠方や旅行に出かけたりする頻度の増加や、移動範囲の拡大には結びつかなかったと結論づけられる。
　最後に、フランスの若者の位置情報共有に関しては、日本の調査対象者と比較すると、位置情報共有についてより慎重な姿勢を見せており、限定的な利用に留める者が多かった。ここにはプライバシー意識の捉え方の差異が大きく関係すると推測できるため、より詳細な調査が今後の課題として残される。

謝辞
　本研究調査は茨城大学人文社会科学部の授業である「社会調査演習 IV」の SNS 班員の協力を得て実施されたものである。調査に励んだ班員の方々、貴重な時間を割いて本班の調査にご協力いただいた方々、東洋言語文化学部日本研究学科セザール・カステルビ先生とフランス国立東洋言語文化学院クロエ・パレツ先生にこの場をお借りして心より感謝の意を表します。

【参考文献】

荒井悠介，2022，「位置情報の共時的共有と若者の友人関係―位置情報共有アプリユーザーの若者を対象に」『公益財団法人村田学術振興財団研究助成報告書』
天笠邦一，2016，「子育て空間におけるつながりとメディア利用―社会的想像力の喚起装置としてのスマートフォン」富田英典編『ポスト・モバイル社会―セカンドオフラインの時代へ』世界思想社，108-122.
岩田考，2014，「ケータイは友人関係を変えたのか―震災による関係の〈縮小〉と〈柔軟な関係〉の広がり―」松田美佐，土橋臣吾，辻泉編『ケータイの 2000 年代：成熟するモバイル社会 』東京大学出版会，171-195.
鵜ノ澤直美，2019，「女子高生がインスタばりに『位置共有アプリ』にどハマりしてるワケ」現代ビジネス HP，（2023 年 3 月 24 日取得，https://gendai.ismedia.jp/articles/-/65823）.
遠藤英樹，2019，「観光をめぐる「社会空間」としてのデジタル・メディア ―メディア研究の移動論的転回」『観光学術論』7(1)：51-65.
鈴木朋子，2019，「自分の居場所を友達に 24 時間公開、若者はなぜスマホアプリ『Zenly』を使うのか」日経クロステック，（2023 年 4 月 2 日取得，https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00160/120900159/）.
鈴木謙介，2005，『カーニヴァル化する社会』講談社.
ダナ・ボイド，2014，『つながりっぱなしの日常を生きる：ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社.
辻泉，2006，「『自由市場化』する友人関係―友人関係の総合的アプローチに向けて―」岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル―親密さのゆくえ―』恒星社厚生閣，17-29.
土井隆義，2008，『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.
土橋臣吾，2013，「第 9 章　ケータイで都市に関わる」土橋臣吾・南田勝也・辻泉編著『デジタルメディアの社会学』北樹出版，145-157.
原田曜平，2010，『新村社会』光文社.
マイナビティーンズラボ，2019，「2019 年ティーンが選ぶトレンドランキングを発表！」マイナビティーンズラボ HP，（2023 年 1 月 10 日取得，https://teenslab.mynavi.jp/column/trendranking2019/）.

〈発　表　資　料〉

題　　名	掲載誌・学会名等	発表年月
Zenly 利用をめぐる日本の若者の親密圏と移動圏に関するプレ調査	中央大学大学院辻ゼミ発表	2021 年 12 月